

令和 6 年 9 月 6 日現在

機関番号：34437

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02865

研究課題名（和文）効果的な評価を可能にするレポート論題についての実証研究

研究課題名（英文）An Empirical Study on Report Topics that Enable Effective Evaluation

研究代表者

成瀬 尚志（Naruse, Takashi）

大阪成蹊大学・経営学部・准教授

研究者番号：60467644

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、効果的な評価を可能にするレポート論題を明らかにするために、大学教員がどのようなレポート課題を出し、そのように評価しているかについて調査した。その結果、教員の評価観が多様であり、かつ、その多様性は教員の専門分野などによっても説明できないことを明らかにした。一方で、どのような論題が出題されているかを分析するために、論題設計のための4つの分類（説明型、応用型、意見型、探求型）を提案した。また、レポート課題に対するそもそものスタンスとして教員のレポート観を4つのタイプ（学術論文タイプ、型重視タイプ、プロジェクトタイプ、理解度確認タイプ）に分類し、各タイプに適した論題設計の方法を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、これまで実質的な分類がなされてこなかったレポート課題に対して、具体的な調査に基づき、実態に即した効果的な論題の分類や教員のレポート観の分類を提示した点にある。この分類の発見は、教員が論題を設計する段階に対して有益であるだけでなく、レポート課題に対する学術的な調査を実施するための基盤となる。また、こうした発見により、教員が全体の分類の中で自身の論題や評価観について自覚的に理解できるようになるため、学生に対する説明もスムーズになる。これにより、学生がレポートに取り組む意欲の向上も期待でき、レポート課題の教育的効果の向上にも繋がると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the types of report assignments university instructors assign and how they evaluate them to identify effective report topics that enable accurate assessments. The results revealed that instructors' evaluation perspectives are diverse and cannot be explained by their academic disciplines. Additionally, we proposed four categories for designing report topics (descriptive, application, opinion, and exploratory) to analyze the types of topics being assigned. Furthermore, we categorized instructors' overall stances towards report assignments into four types (academic paper type, format-focused type, project type, and comprehension confirmation type) and demonstrated methods for designing topics appropriate for each type.

研究分野：高等教育

キーワード：レポート レポート課題 レポート論題 レポート評価 ライティング教育

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

大学の授業において課されるレポート課題は、学生の情報収集を前提としており、学生自身の理解に基づいているかどうかを評価することが困難であるという問題がある。特に、インターネットの普及により、学生が容易に情報をコピー&ペーストできる現代において、適切に学生の知識や能力を評価するための論題の設計がますます重要となっている。われわれはこれまで、主に剽窃を防ぐための論題設計に焦点を当て研究を進めてきたが、評価という観点から、どのように問えば適切に知識や能力を測れるかという課題は未解決のままであった。

評価課題としてのレポート課題では、授業を通して学生が何をどのように理解しているかを評価する必要がある。しかし、情報収集を前提としたレポート課題では、レポートに書かれている内容を学生がそのまま理解しているとは限らない。インターネットが普及した現代において、レポート課題でどのように問えば、教員が評価したい知識の理解や能力を評価できるのかについて改めて検討する必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、レポート課題において、どのような論題を設定すれば学生の知識や能力を効果的に評価できるのかを明らかにすることである。学生が情報収集をすることを前提とし、それでもなお学生の知識やスキルを評価するための論題設計や評価方法を明らかにすることを目指す。

レポート課題は多くの大学の多くの授業で出題されている。しかしながら、どのような論題を出題すべきかや、どのようにレポートを評価すべきかについての研究は、国内においてはほとんどないのが現状である。それゆえ、大学教員に対する調査を実施した上で、効果的な論題や評価方法について明らかにすることを目指す本研究の意義は非常に高いと考えられる。また、「何を教えるか」ではなく「何ができるようになったか」が重視されるようになってきた現在の高等教育において、レポート課題という汎用的な評価課題に対する本研究は非常に大きな意味を持つと言える。

3. 研究の方法

本研究では、大学教員を対象に質問紙調査とインタビュー調査を実施し、出題形式や評価基準に関するデータを収集した。

(1) 質問紙調査 (web 調査)

質問紙調査 (web 調査) は、2021 年度から 2022 年度に実施した。主に人文社会科学領域の大学教員を対象とし、150 名から回答を得た。調査では、各教員の授業内容、レポート課題の出題方法、評価基準、剽窃対策などについて調査した。

(2) インタビュー調査

質問紙調査でインタビュー調査への協力の承諾を得た教員 37 名に対して、インタビュー調査を実施した。レポート課題を出題する際の具体的な狙いや工夫について詳細を聞き取った。

(3) 論題の効果分析

質問紙調査およびインタビュー調査で収集したデータをもとに、教員がレポートをどのようにとらえ、論題を設計し、評価をしているのかについての分析を行った。特に評価の仕方 (何を重視して評価をするか) に着目して分析を行った。

4. 研究成果

本研究では、教員の評価観の多様性、論題の分類、および教員のレポート観の分類に関して重要な知見を得ることができた。以下でそれぞれについて具体的に説明する。

(1) 教員の評価観の多様性

質問紙調査 (web 調査) の回答を分析したところ、教員の評価観 (何を重視して評価するか) が非常に多様であることが分かった。調査では、さんとさんという二人の学生を設定し、両者から相反する特徴を持ったレポートが提出された場合、どちらを高く評価するかを質問した。選択肢は「さんに高い点数をつける / さんに少しだけ高い点数をつける / さんに少しだけ高い点数をつける / さんに高い点数をつける」であり、具体的には以下の 4 項目について評価を求めた：

独自性 or エビデンス
引用 or 内容の面白さ
専門用語の理解 or 講義より進んだ内容
様々な考察 or 明確な主張

分析から、4項目目(様々な考察 or 明確な主張)で回答に偏りが見られたものの、ほとんどの項目で回答結果はばらついた。このばらつきの要因について、教員の専門分野の違いに起因するのではないかという仮説を立てて分析を行ったが、そうではないことがわかった。さらに、どのような評価をしているかということが、回答者のどのような属性に起因しているかを様々な観点から分析したが、ほとんどの項目で統計的な有意差は見られなかった。

これにより、少なくともレポートの評価に関しては、教員がそれぞれ独自の基準で評価している可能性が高いことが示唆された。レポート課題の評価に関しては、分野ごとに明確な基準が設定されているわけではなく、各教員が手探りで試行錯誤しながら評価基準を模索していると考えられる。この評価観の多様性に関しては、教員の担当している科目の多様性(具体的には科目の到達目標の多様性)に起因している可能性も考えられる。今回の調査ではその要因についての分析はできなかったが、質問紙の中のあらゆる項目との相関を分析した結果、教員の専門性も含め、多様性の要因を説明できなかった。そのため、教員が独自の工夫をしていることが評価観の多様性に影響していると考えられる。

(2) 論題の4分類

さらに、レポート論題を説明型、応用型、意見型、探求型の4つに分類することができた。それぞれの分類がどのような知識の理解や能力を評価するのに適しているかを示した。具体的には以下の通りである：

説明型論題：知識の理解を評価するのに適しており、事実に基づいた記述が求められる。

応用型論題：理論や概念の実際の適用能力を評価するのに適しており、具体的な事例の提示が求められる。

意見型論題：学生の意見や主張を評価するのに適している。

探究型論題：問いに対する答えの探究を促すのに適している。

(3) 教員のレポート観の4分類

これまでの成果を踏まえ、具体的な論題ではなく、教員自身がレポートをどのようなものとして、何を目指して出題しているかについて、ある程度の類型化が可能であることがわかった。具体的には、次の問いに対する回答から分類が可能となる。

レポート課題でアカデミックライティング(AW)を重視していますか？(構造化された根拠としての論証を求めていますか？)

レポート課題と卒業論文との接続を意識していますか？(レポート全体を学生がオーガナイズすることを求めていますか？)

この2つの問いに対する回答より、教員のレポート観は以下の4つに分類できることがわかった：

学術論文タイプ：論証を重視し、オーガナイズを求める。学術論文と近いタイプのレポートを求める。学生に問いを設定させ、自由度が高く、論証も重視される。

型重視タイプ：論証を重視するが、オーガナイズは求めない。指定された型に沿って議論できるかを通して、適切な論証ができているかを重視する。

プロジェクトタイプ：論証は重視しないが、オーガナイズを求める。学生に構造化されたレポートを求め、卒論との接続を意識している。

理解度確認タイプ：論証もオーガナイズも求めない。授業内容の理解度を確認することを重視し、授業で学んだことを身につけられているかを問う。

これらにより、各教員がレポート課題の設定方法や評価基準をより明確に把握できるようになり、効果的な評価を行うための基盤が築かれた。

本研究から、実際に人文社会科学系の教員がどのような論題を出しているのかについて、具体的な類型にもとづいて説明することが可能となった。これにより、レポート論題の設計に悩んでいる教員に対する有益な示唆を与えることができるようになった。また、教員自身のレポート観を分類が可能となったことで、多様な教員に対してより効果的な論題を出題できる地盤が整ったと言える。レポート課題は海外でも出題されている汎用的な評価方法であるため、本研究の成果は国内だけでなくとどまらず、国際的にも有用である。本研究の成果をベースに、大学教員向けのレポート課題出題のためのガイドブックを作成している(成瀬尚志『ライティング教育から考えるレポート課題(仮)』ひつじ書房2024年9月出版予定)。

今後は、今回成果として見いだした「レポート論題の4分類」と「教員のレポート観の4分類」がどれほど有効であるのかについて、多様な大学の教員から意見を聞くことで、説明モデルを洗練させ、より実践に即したものにすることを旨とする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高橋亮介	4. 巻 859号
2. 論文標題 教室で『歴史評論』を読む	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 22-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 成瀬尚志、児島功和、崎山直樹	4. 巻 42号第1巻
2. 論文標題 論題分析のためのフレームワーク 構文論的分析と状況設定的分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 36-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 成瀬尚志	4. 巻 41号第1巻
2. 論文標題 ライティング教育における論題の役割	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 57-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 井下 千以子, 佐藤 広子, 小林 至道, 岩崎 千晶, 佐渡島 紗織, 柴原 宜幸, 大島 弥生, 成瀬 尚志, 関田 一彦	4. 巻 41号第2巻
2. 論文標題 ライティング・センターの機能と展望：正課と正課外をつなぐライティング教育を目指して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 90-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 成瀬尚志	4. 巻 2024年2月号937
2. 論文標題 学生に文章を書かせることの意味	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 13-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件 (うち招待講演 13件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 成瀬尚志
2. 発表標題 授業の理解度を確認するためのレポート課題の設定の仕方とその多様性について
3. 学会等名 叡啓大学FD研修会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 成瀬尚志、崎山直樹
2. 発表標題 レポート論題における制約条件の分類について web調査の分析から
3. 学会等名 大学教育学会第44回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 成瀬尚志
2. 発表標題 レポート課題をいかにして設計するか?
3. 学会等名 京都外国語大学2022 年度夏季専任教員研修会 (FD) (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 成瀬尚志
2. 発表標題 レポート課題をどのように設定するか？ 自分で考えさせるレポートの出し方について考える
3. 学会等名 創価大学第3回学士課程教育機構セミナー（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 成瀬尚志、児島功和、崎山直樹
2. 発表標題 大学教員のレポート観の多様性について レポート課題に関するアンケート調査から
3. 学会等名 第29回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 成瀬尚志
2. 発表標題 レポート課題を軸に考える授業設計 剽窃を防ぎ、学生を思考にいざなうレポート課題の設定
3. 学会等名 2021年度第1回中京大学FDセミナー（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 成瀬尚志
2. 発表標題 web使用を前提とした授業レポート課題の設計
3. 学会等名 北九州市立大学国際環境工学部FD研修（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 成瀬尚志、児島功和、崎山直樹
2. 発表標題 論題分析のためのフレームワーク 構文論的分析と状況設定的分析
3. 学会等名 大学教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 成瀬尚志、児島功和、崎山直樹
2. 発表標題 レポート課題を捉える3つの観点 大学教員を対象とする試行的調査から
3. 学会等名 大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 成瀬尚志
2. 発表標題 学生の思考をつなぐためのレポート課題の設計
3. 学会等名 広島修道大学第33回 初年次教育セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 成瀬尚志
2. 発表標題 剽窃を防ぎ、学生を思考にいざなうレポート課題の出し方
3. 学会等名 鳥根県立大学FD研修会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 崎山 直樹、成瀬尚志
2. 発表標題 レポートから授業をデザインする
3. 学会等名 一橋大学大学院社会学研究科ティーチングフェロー・トレーニングコース2019年度アカデミックキャリア講習会B（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 成瀬尚志、片山悠樹、笠木雅史、崎山直樹
2. 発表標題 レポート観の多様性の要因分析
3. 学会等名 大学教育学会第45回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 成瀬尚志
2. 発表標題 レポート課題を出題する教員のねらいの分析
3. 学会等名 第30回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 成瀬尚志
2. 発表標題 初年次教育と卒業論文とを接続するための ライティング教育について考える レポート課題でのねらいの分類を通して
3. 学会等名 新潟大学未来教育セミナー（令和5年度新潟大学全学FD）（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 成瀬尚志
2. 発表標題 学生を思考にいざなうレポート
3. 学会等名 令和5年度大阪大学大学院人文学研究科FD研修会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 成瀬尚志
2. 発表標題 レポート課題の出し方について
3. 学会等名 豊橋創造大学 / 豊橋創造大学短期大学部 合同FD研修会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 成瀬尚志
2. 発表標題 レポート課題の提示の仕方
3. 学会等名 第10回 創価大学 教育フォーラム 法学部分科会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 成瀬尚志
2. 発表標題 「自分で考えて書く」レポート課題の設定とその評価
3. 学会等名 日本生命倫理学会授業法研究部会 2023年6月度 定例会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 井下 千以子, 成瀬 尚志他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 298
3. 書名 思考を鍛えるライティング教育	

1. 著者名 崎山 直樹、二宮 祐、渡邊 浩一、井上 義和、笠木 雅史、北村 紗衣、標葉 靖子、標葉 隆馬、 嶋内 佐絵、成瀬 尚志、羽田 貴史、光永 悠彦、吉田 文	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 252
3. 書名 現場の大学論	

1. 著者名 笠木雅史	4. 発行年 2021年
2. 出版社 名古屋大学高等教育研究センター・教養教育院発行	5. 総ページ数 -
3. 書名 ライティングを指導する教員のためのハンドブック 第1部：大学ライティング教育の目的	

1. 著者名 笠木雅史	4. 発行年 2021年
2. 出版社 名古屋大学高等教育研究センター・教養教育院発行	5. 総ページ数 -
3. 書名 ライティングを指導する教員のためのハンドブック 第2部：ライティング課題の設計	

1. 著者名 笠木雅史	4. 発行年 2021年
2. 出版社 名古屋大学高等教育研究センター・教養教育院発行	5. 総ページ数 -
3. 書名 ライティングを指導する教員のためのハンドブック 第3部：ライティング課題の評価とフィードバック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>レポート論題研究 http://ihuru09.jp/archives/projects/%e3%83%ac%e3%83%9d%e3%83%bc%e3%83%88%e8%a9%95%e4%be%a1%e7%a0%94%e7%a9%b6 コピペを防ぐためのレポート課題の出し方の工夫 https://www.youtube.com/watch?v=0-zz4gPHdbg&t=44s</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	崎山 直樹 (Sakiyama Naoki) (10513088)	千葉大学・大学院国際学術研究院・准教授 (12501)	
研究分担者	高橋 亮介 (Takahashi Ryosuke) (10708647)	東京都立大学・人文科学研究科・准教授 (22604)	
研究分担者	片山 悠樹 (Katayama Yuki) (40509882)	愛知教育大学・教育学部・准教授 (13902)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	笠木 雅史 (Kasaki Masashi) (60713576)	名古屋大学・大学院情報学研究所・准教授 (13901)	
研究分担者	児島 功和 (Kojima Yoshikazu) (80574409)	山梨学院大学・経営学部・准教授 (33402)	削除：2023年6月14日

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	井頭 昌彦 (Igashira Masahiko) (70533321)	一橋大学・大学院社会学研究科・教授 (12613)	
研究協力者	野口 久美子 (Noguchi Kumiko) (70781441)	八洲学園大学・生涯学習学部・教授 (32722)	
研究協力者	野村 朋弘 (Nomura Tomohiro) (00568892)	京都芸術大学・芸術学部・教授 (34319)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関